The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	20世紀初頭の英国のファッションにおけるキモノブームの影響について ： 雑誌クイーンを中心に
Author(s)	サワシュ, 晃子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2015, 49, p. 15-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

20 世紀初頭の英国のファッションにおける キモノブームの影響について

――雑誌クイーンを中心に――

サワシュ　晃 子

キーワード：20 世紀／英国／ファッション／ジャポニスム

1. はじめに

本稿は、20 世紀初頭の英国のファッションに、日本の着物のデザインの特徴がどのように取り入れられていったのかを段階的に検証するとともに、キモノ風デザインの流行がどういった人々を中心に起こっていたのかを分析するものである。そして、それによって、英国のファッションにおけるジャポニスムの特徴とその意味を明らかにしたい。

ファッションの分野におけるジャポニスムは、深井晃子氏『ジャポニスムインファッション　海を渡ったキモノ』で初めて明らかにされた。[1)] 本書では、キモノの流行と現地のデザイナーへの影響を、主にフランスの事例を中心として考察している。一方、当時日本の最大の貿易相手国であった英国には、キモノを含む大量の日本製輸出工芸品が渡っており、その影響はフランスと比べても意義深いものであった。とりわけ、英国では 19 世紀後半から、唯美主義者やレイショナルドレス協会によって、コルセットから身体を解放する必要性が提唱されていた。ここに、当時海外ではゆったりした衣服と認識されていた日本の着物を受け入れる土壌があったことは注目すべきである。

しかしながらこれまで、英国のファッションにおける着物の影響は、米今

由紀子氏や佐々井啓氏、Elizabeth Kramer 氏のような、19 世紀末までを対象とする研究の中で、仮装用のコスチュームや室内着への影響として捉えられるにとどまってきた。[2] そのため、英国内でキモノブームが拡大し、キモノが一部のコレクターだけでなく、一般にまで浸透した 20 世紀初頭の大流行とその外出着への影響については見落とされてきた。また、実際に流行にどれほどの規模と広がりがあったのかも明らかにされてはこなかった。

1904 年のスペインの雑誌には「ロンドンでは、ジャポニスムが女性たちの間に広がっている。キモノは以前には家でのみ着用されたが、今では女性たちはそれを着て劇場に行く。」[3] という記事が掲載された。この記述から、仮装用コスチュームと室内着にのみキモノの影響が見られたとされる 19 世紀後半とは異なり、20 世紀に入ると、外出着としての衣裳にキモノ風のデザインが取り入れられるようになり、それがロンドンの流行として発信されていたことがわかる。それでは、英国でキモノ風のデザインはどのように取り入れられて流行に至ったのだろうか、雑誌クイーンの記事ほか文献資料及び、英国の美術館・博物館に収蔵されている実際の服飾資料を参照しつつ、具体的に明らかにしたい。

2. 雑誌クイーン（*The Queen*）に見る、キモノ風ファッションの流行の変遷

クイーンは、1861 年に英国で創刊された、ミドルクラス以上の女性を読者対象とする、当時の英国においてもっとも有力な女性誌のひとつである。[4] 20 世紀初頭には、週刊新聞の体裁をとっており、ファッション記事を中心に、劇場や競馬場を舞台とした社交界の話題も提供していた。一方で、パリでの流行を伝える記事が毎週欠かさず掲載されていたことも見逃せない。本稿ではまず、同誌で紹介されるキモノ風ファッションの記事及び広告を分析することで、20 世紀初頭の英国において、日本の着物のデザインの特徴がどのように同時代のファッションに取り入れられていったのかを、段階別に検証する。

同誌では、キモノ風の衣裳に関する記事が、20 世紀に入ってからの約 20 年間を通し、継続して掲載されている。そういった記事の挿絵では、頭の左右で結った日本髪風ヘアスタイル、団扇あるいは扇子や鏡といった小物、月やちょうちんなどを背景に用いるといった描き方が共通している。このように屏風や団扇などの日本の品物を「日本のアレゴリー」として画面に描き込むことは、すでに 19 世紀から絵画の分野では常套手段であり、キャプションに Kimono や Japanese という表現がなくとも、それらの補足的な演出が、日本や日本の着物をイメージした衣裳であることを示すと考えられる。[5] こういった記事は、1907 年と、1911 年～ 1913 年にとりわけ多く出現することから、この二つの期間に英国のファッションにおけるジャポニスムはもっとも大きな盛り上がりを見せたことが推察できよう。さらに、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて英国内で発行された新聞記事の中で、Kimono あるいはそれが間違った発音で広まった Kimona という単語の出現頻度を調べてみても、1907 年と 1913 年に突出していることを付け加えておきたい。[6]

それでは以下より、キモノ風衣裳のデザインの特徴を元にして受容の過程を四段階に区分し、それぞれの期間の記事と広告を分析することで、その様相を具体的に検証したい。

2-1. 1900 年から 1903 年―キモノ人気の一般への広がり

第 1 節で述べたように、19 世紀末に、キモノ風のデザインは主に室内着を中心に取り入れられたと先行研究が明らかにしている。受容の第一段階であるこの時期には、19 世紀末の傾向を引き継いでおり、キモノ風のデザインが見られるのは、ジャパニーズティージャケットやキモノ型ティージャケットのような室内着に限られていた（fig.1）。こういった室内着は、当時のロンドンの大手百貨店の広告にも掲載されており、この頃から一般の消費者への流通が始まったと考えられる。

ジャポニスムの流行の最盛期である 19 世紀後半、キモノは、ホイッスラーなど一部の日本美術愛好家の男性コレクターが収集する日本趣味の品であっ

た。彼らは英国での東洋製品販売の中心的存在として多くの先行研究で言及されているリバティ商会やフランスの東洋製品専門店などを通じて、キモノを購入していたという。しかし、20 世紀に入ると、クイーンのような、一般の女性たちを対象とした雑誌にキモノが掲載されるようになり、東洋製品専門店ではない大手百貨店でもキモノの販売が始まる。その背景にあったのは、日本の業者による輸出用キモノの生産・輸出の拡大であった。[7] 20 世紀の最初の 20 年間に隆盛をみた輸出用キモノ産業では、とりわけ英・米への輸出量が突出しており、例えば 1910 年の日英博覧会の年だけでもおよそ 45 万枚が英国に渡っている。[8] キモノ風デザインが現地ファッションに取り入れられ始めた背景には、この日本製輸出用キモノの流行があったことは疑いない。

とはいえ、第一段階のこの時期には、子供の仮装大会では必ずキモノ（「ゲイシャ」の仮装）が登場することなどから、特異なもの、非日常的なものという捉え方もまだ根強かったことがわかる。キモノ風衣裳のキャプションでは「風変わりな」（quaint）という単語が多く使われることからもまた、それは明らかである。 この期間のキモノ関連記事の総数は、以降の期間と比べると圧倒的に少ないものの、1902 年 1 月の日英同盟調印の影響もあってか、日本女性の絵柄が表紙に使われた月もあり、日本に対する注目度が徐々に高まりつつあったことが伺える。

そして、この時期の終わり頃になると、キモノを新たなファッションの潮流として捉える傾向が見え始める。

> 東洋の雰囲気が一世を風靡しているが、それは、魅力的なパリの空気と結びついて、東洋的な要素の風変わりな点やちょっとした異様さが、西洋の女性にとって非常に魅力的なものに映るようになったためである。[9]

この記述は、当時の英国でキモノがファッショナブルなものとして捉えられ

るようになったこと、そしてそれはフランスの影響によるところが大きかったということを示している。第一段階の終わりにこのようにして始まったキモノのファッション化は、次の段階でさらに一般に拡大しながら展開していく。

2-2. 1904年から1906年―大流行前夜

1904 年の日露戦争勝利によって始まったこの時期、この勝利によって日本に対する世界の認識は大きく変化しようとしていた。かつては「異国の奇妙な小国」という程度のものでしかなかったはずの日本イメージは、とりわけ英国内においてはドイツと並んで「見習うべき国」へと変化しつつあった。かつての大英帝国の威信を失いつつあった自国を救うのは、日露戦争勝利の要因として注目された日本の「武士道」であるはずだという言説とともに、この後、日本のイメージは「油断のならない国」というものへ転換していく。[10] 日本への注目度の高まりはまた、着物姿の日本人女性（日本人女性に扮した英国人も含む）がこの時期三度にわたって表紙に使われたことにも現れている。*The Darling of the Gods* など、日本を題材とする演劇がロンドンで相次いで上演されていたことも大きな理由の一つではあるが、この時期、日本とその民族衣裳である着物が、クイーンの読者である女性たちに紹介するに値するテーマとして扱われるようになったと言っていい。

こうした時代の転換期にあって、英国ファッションにおけるキモノの存在感はさらに大きくなっていく。その一つの現れとして、これまでは室内着に限って取り入れられるものであったキモノ風のデザインが、外出着にまで採用されるようになったことが挙げられよう。fig.2 は、レースなど西洋の素材をふんだんに使用しており、一見すると日本の着物とは似ていないように見えるが、「愛らしい麻のキモノで、粗いレースで縁取りされたもの」[11] というキャプションが添えられている。この種のコートの挿絵には、しばしば背景に月や提灯といったモチーフを採用していることからも、この時期のキモノ風衣装の代表的なものがこのようなデザインであったと考えてよい。

さらに、日本刺繍（Japanese Embroidery）をモチーフとして取り入れたものも多く見受けられる。「日本刺繍が入ったダルマティカ袖を模した肩マント」[12] や「 袖口が、素敵で控えめな虹色の目を引く日本刺繍で、色々な大きさの目立つ丸い円形模様になっている」[13]（fig.3）ドレスなどである。

このように、日本刺繍をモチーフとして取り入れることは、手軽に日本風の雰囲気を出すことができるため、当時よく行われた。19 世紀末より、西欧諸国では日本製の刺繍壁掛けなどが流行し、かなりの数が輸出されている。[14] それらを製作した高島屋などの日本の業者は、ドレスの装飾などに使える小さな刺繍も同時期に輸出用として販売していた。[15] こういった事情により、日本刺繍は海外でも注目され、また手にも入りやすかったことから、ドレスの装飾としても流行したのであろう。とはいえ、女性はコルセットを用いることが一般的であったこの時代にはまだ、キモノ風のデザインを外出着に採用するとしても、日本刺繍などをモチーフとして使う表面的なものにとどまっていたことは看過できない。

一方で、当初「風変わり」とされていたキモノ風デザインへの評価は、この時期になると、「簡素」（simple）や「芸術的」（artistic）といった肯定的なものへと変化する。「この上なくシンプルではあるものの、これらのデザインが手本にしたシルエットは、最高に快適で見た目もよい。（中略）袖はオーソドックスなキモノ型で、きわめてシンプルである」、[16] あるいは、「天使の羽の形をした袖に寄せた芸術的なひだ、（中略）ブルー地にオレンジ、ピンク、グリーンの透ける日本刺繍の縁飾り」[17] といった記述は、19 世紀後半の日本趣味ブームを牽引した雑誌『芸術の日本』（*Artistic Japan*）の影響もうかがわせる。また、ゴドウィンやロセッティなど、19 世紀後半の日本美術愛好家たちにとっては、簡素なデザインというものが日本イメージの一つにもなっていた。[18] こういったイメージは、エキゾチックで東洋的なものとはまた違った新たな日本イメージとして、20 世紀に能や俳句などを通して、西欧で醸成されていった。[19] キモノのデザインも、それに寄与したのではないかと推測できる。

2-3. 1907年から1910年―第一次「ファッションのジャポニスム」ブーム

1907 年に入ると、Kimono という言葉の使用が著しく増加し、「キモノから着想を得た」（Kimono-inspired）とするコートやドレスの記事が誌面を占めるようになる。また、表紙には、先に挙げた「着物姿の日本人女性」とは異なり、「キモノ風ファッションの西洋人女性」が登場する（fig.4）。

この表紙では、女性は明らかに西洋人として描かれているものの、髪は日本人のような黒髪で、19 世紀末から西洋における日本イメージの典型としてしばしば用いられた菊の花を合わせて描いていることから、エキゾチックで東洋的な印象を与えようという意図が見て取れる。また、ゆったりとしたキモノ風衣裳から腕や首元を大きく露出させ、性的に誘うようなポーズと表情をとっているのは、19 世紀後半から引き続く「ゲイシャ」としての日本女性のイメージを下敷きにしているためであろう。[20] このことは、異国の民族衣裳としての「着物」ではなく、西洋人女性が着る「キモノ」が浸透しつつあったこととともに、19 世紀的な従来の日本人女性イメージの枠組みも併存していたことを表しているといえよう。

1907 年、クイーンには「たやすく推察される通り、キモノ狂いは広く認められる」、[21]「流行は著しく日本の影響に向かって進んでいる」[22] との記事が掲載される。一方で、この時期になると子供の仮装大会の紹介記事においては、日本の着物がほとんど登場しなくなっていた。これにより、キモノがもはや非日常を演出する異国の風俗ではなく、Kimono というファッションデザインの一ジャンルとして位置づけられたと考えられるこの時期を、英国における第一次「ファッションのジャポニスム」ブーム期と指摘したい。

20 世紀に入って以降次第に、英国の室内装飾ではヴィクトリア朝の暗く重厚なデザインから、明るくシンプルなデザインが好まれるようになっていた。それに伴って、キモノ風デザインも、かつてのようにレースがふんだんに使用されたものから、より簡素なデザインへと変化していく。当時の大手百貨店の一つ、ディキンスアンドジョーンズが 1907 年に発売した「トー

キョーコート」（Tokio Wrap）は、その特徴をわかりやすく備えている（fig.5）。このコートは、「空前の売れ行き」で「全く在庫が残らない」ほどの人気を博したとして、翌年もまた「ニュートーキョー」（New Tokio）として再販されたという。[23)]

一方、コートの下に着用するドレスにおいては、キモノと呼ばれるデザインは、日本の着物に似た打ち合せのV字襟と幅の広い袖を指すものであった（fig.6）。この時期の流行であったエドワーディアン・ルックは、従来同様にウエストはコルセットで締めるものであったため、着物の直線的なシルエットが取り入れられることはまだなかった。日本の着物に西欧が関心を抱いた理由の一つが、コルセットを使用しない開放性にあったと指摘されているが、実際はその開放性を積極的に採用するまでには時間を要したということがわかる。

第一次「ファッションのジャポニスム」ブームを迎えたこの時期、キモノ風のデザインは「キモノ風袖」（Kimono Sleeve）や「キモノ風身頃」（Kimono Corsage）として取り入れられ、広く一般に浸透する。しかし、それとてやはり、先の日本刺繍と同様、表面的なモチーフとしての流用の域を出ないものであり、コルセットの呪縛を逃れ、全体のシルエットまで変化させる構造的な影響を及ぼすには、次のブームを待たなくてならなかった。

2-4. 1911年から1914年―第二次「ファッションのジャポニスム」ブームとパリ・オートクチュールの影響

エドワード朝の終焉とともに、キモノ風衣裳のシルエットに変化が訪れる。先に述べたように、これまでコートの下のドレスは、コルセットを使用してウエストを締め上げるのが一般的だったが、この時期のドレスには日本の着物を彷彿させる直線的なシルエットが見られるようになる（fig.7）。さらに、裾にトレーンをつけ、後ろを長く引きずるようなスタイルもしばしば見られた（fig.8）。

すべてのガウンにはトレーンがあり、体が長くスリムなシルエットになるよう、非常に優美なひだがよせられている。肩回りはとても襟ぐりが深く、キモノの形を残している。[24)]

これには、キモノ風の縦長のシルエットをより強調する狙いがあった。

fig.8 は、この時期の代表的なデザインのキモノ風衣装であるが、背景の提灯に加え、ギリシャ風の建築が描き込まれているのが目を引く。19 世紀の英国では、古代ギリシャと日本のイメージの混淆が起こっていたことは知られている。[25)] 新聞などのメディアでは「日本の女性は（中略）ギリシャの女性とそっくりの衣裳を着ている」といった記述がしばしば見られ、日本の着物はギリシャのゆったりとした衣服と同一視されていた。[26)] fig.8 からは、このような 19 世紀のイメージが 20 世紀になってもなお受け継がれていたことがうかがえる。

一方で、obi という言葉が使われるようになったのもこの時からで、明らかに日本の帯を模したベルトのようなものが付いたドレスが登場する（fig.9）。「青いシフォンクレープのコートで、アイボリー色のレースの大きなリボンが体の後ろについているが、これはちょっと日本のオビを連想させる」[27)] といったようなものや、「標準的なキモノに必要とされる、正装にふさわしい見た目であり、スカートの端のシルクの縁の折り返しとオビベルトまでついている」[28)] ようなものである。

これらの記述は、ブームが最盛期を迎える中、より本物に近いものが求められるようになったことをうかがわせるが、一方で、オビの採用には、当時のウエスト周りのシルエットの変化をよりスムーズに受け入れられるようにするための補助的役割もあったのではないかと推察される。

また、ポール・ポワレやウォルトなど、当時のパリの人気デザイナーたちが発表したキモノ風衣裳に酷似したデザインも多く出回るようになる。ちょうどこの頃、パリのオートクチュールの名声が高まるにつれ、ニューヨークやロンドンの百貨店や大手衣服メーカーがパリのデザイナーの作品の複製を

安値で販売するという問題が起こっていた。[29] 例えば、1910年のハロッズのカタログの記述にも、ハロッズのファッション部門担当者たちは定期的にパリを訪れ、現地代理店を通して流行を把握しており、同社の作業場では「多くのオリジナルデザインと、選り抜きのパリのモデルのレプリカ」が製作されているとある。[30] つまり、キモノ風のデザインは英国で独自に発達したものというわけではなく、そのデザインの多くは、パリでの流行を模したものであった。とはいえ、英国では多くの百貨店や小売店がキモノ風衣裳を販売したことで、一般レベルにまでブームが広がったことは、デザイナーへのキモノの影響を中心としたフランスに関する先行研究では明らかにされてこなかった、英国の独自性だと言ってよい。

この時期になると、1907年の第一次ブーム以降、いったん減少傾向にあったKimonoという言葉が再び誌面を席巻し、第二次「ファッションのジャポニスム」ブームを迎える。この第二次ブームにおいて、英国のファッションは大きなシルエットの変化を経験する。19世紀末から、英国ではコルセットの害悪に注目が集まり、廃止が叫ばれるようになっていたものの、20世紀のキモノブームのさなかでも、コルセットで締め上げたウエストだけは変化しなかった。しかしここにきてようやく、モチーフを表面的に取り入れるだけでなく、シルエットそのものを変化させる、より原理的で構造的な影響を及ぼすに至った。もちろん、その後もコルセットの販売・使用は続いたし、完全に撤廃されるまでには長い時を待たなくてはならない。とはいえ、製作方法さえをも変化させることになるシルエットの変化は、当時の西欧のファッションにとって大きな意味を持つものであった。[31]

1914年に入り第一次世界大戦が近づくと、他の多くのファッション誌がそうであったように、クイーンでも戦争関連の記事が増え、ファッション記事自体が激減する。キモノブームがこの後いったん収束に向かったこともあり、その後数年の間クイーンにはキモノ関係の記事があまり見られなくなる。1920年代になると、アール・デコブームの到来とともに、キモノブームが再び復活するのだが、それについては別の機会に論じたい。

3. 英国内に現存するキモノ風衣裳

クイーンの分析で見てきたように、キモノ風衣裳には、日本刺繍やキモノ風の襟などのモチーフを装飾として取り入れる表層的な影響と、シルエット全体を直線的なものにする、より本質的で構造的な影響の二段階が見られた。このうち、特に構造的な影響について、製作に当たって実際にはどのように具現化されたのか、英国内の美術館に現存するキモノ風衣裳の実例について検証することで、より具体的に明らかにしたい。

fig.10 はハロッズの社内資料室に所蔵されているコートの実物である。クリーム色のウール地に日本刺繍と思しき菊のシルク刺繍が襟、袖、後ろ身頃に配されている。1910 年から 1914 年頃にハロッズで製作・販売されたうちの一点であるこのコートは、図のように着物専用のコートにつるしてみると、ほぼ完全に平面の状態に帰することがわかる。[32] つまり、従来の西欧の衣服の製作方法である立体裁断ではなく、日本の着物と同じ平面裁断で製作されているということであり、全体が直線で構成されているのが見て取れる。同室所蔵のファッションカタログに、ほぼ同型のものが掲載されているが、背景に提灯があしらわれていることからも、日本をイメージしたものであることは間違いない[33]（fig.11）。これに類似のタイプのコートは、しばしば「キモノコート」と名付けられていた。

一方、fig.12 は、1917 年頃に製作されたコートで、タグからロンドンの Fays. Ltd. の商品であることがわかる。身頃に瑞雲、裾に青海波、背面に龍の刺繍が施されている。当時の西欧で、中国と日本はしばしば混同されていたが、この装飾にもそれが見て取れる。こちらは従来の西欧の衣服の製作に用いられる立体裁断で製作されているが、縦長で直線に限りなく近いシルエットを再現しようとしていることからも、日本の着物を意識したデザインであることは疑いない。

1913 年頃の製作とされる fig.13 は、襟と背中に入った大きな菊の花の刺繍

が特徴的なコートである。この刺繍は、19 世紀後半から欧米諸国で紹介・収集され、当時の様々なデザインに大きな影響を及ぼした型紙や、同様にデザインとして人気を博した紋から着想を得たものに違いない。[34] シルエットは、身体の線を覆い隠すルーズなもので、裾に向かって幅が狭くなる、日本の打ち掛けを彷彿させるものである。このコートは一枚の布から構成されたデザインになっており、ここにも日本の着物の構造的な影響が見て取れる。

この構造的影響がより際立っているのが、リバティ商会が製作したキモノ風マントである。これは、平面に置いて広げると、完全に一枚の布の形に還元することができる（fig.14）（fig.15）。

先にも述べたように、従来の西欧の衣服は、立体裁断方式、つまり体に沿わせながら布を裁断し、身体の丸みに合わせてつなぎ合わせて縫製していくため、日本の着物のように平らに置くことはできない。これは、洋服と和服の本質的で決定的な差異であると言えるが、キモノ風衣装では、和服と同じ平面裁断を用いて製作されているものが多く見られる。このように、20 世紀に起こったファッションのジャポニスムブームは、それまでの西欧の伝統的な衣服のシルエットを大きく転換させるに伴い、製作方法そのものを変化させるという、より本質的で構造的な影響を与えたという点で、非常に大きな意味を持つものであった。

4. キモノ風ファッションのブームは誰を中心に起こったか

それでは、これら 20 世紀のキモノブームにおいて消費の主体となったのは、どのような人々だったのだろうか。クイーンに掲載された広告を見ると、キモノ風衣裳は当時、大手百貨店を中心に数多く出回っていたであろうことが推測できる。それらを取り扱った店舗の集まる場所を 1904 年当時のロンドンの地図上で確認すると、ロンドン西部、王室保護下の特別区でもあるケンジントンアンドチェルシー地区とウエストエンド地区に集中していることがわかる。現在でもロンドン随一の富裕層が集まるこれらの地区には、

ハロッズ百貨店をはじめ、当時のミドルクラス以上を対象とした百貨店、高級小売店のほとんどが集中していた。

1920 年 5 月の英国の小説雑誌に掲載された作品「ピンク・キモノ」（*The Pink Kimono*）には、同地区内の一角、スローンスクエアにある高級店で扱われる日本製キモノに憧れる女性の描写が見られる。[35)]

> 彼女は、前からずっと本物の日本のキモノに憧れていた、もっと高級な週刊誌に絵入りで紹介されているようなものや、あるいはスローンスクエア界隈のああいった小さな高級店のウィンドウに飾ってあるような類いのものである。彼女にはよくわかっていた（中略）それがばかげた、意味のない憧れであると。週にたった2ポンドしか稼ぎのない事務員に、キモノなんて一体何になるというのだろう。誰に見せるわけでもなし、百回分の昼食代になるくらいの値段がするだろうに。[36)]

これらの高級店の顧客層というのは、20 世紀に台頭し、大量消費の中心的担い手ともなった、ミドルクラスを中心とする新興の富裕層であったと考えられる。「ピンク・キモノ」でも、主人公の憧れのキモノを持っているのは、女学校時代の同級生で、現在は事業で成功を収めた裕福な夫に嫁いだ、典型的なミドルクラスの女性であった。

以上のように、キモノは、ミドルクラス以上をターゲットにしたクイーンのようなメディアで宣伝され、ロンドン随一の富裕な地区を中心に消費された。つまり、英国のキモノ風ファッションのブームは、ミドルクラス、アッパーミドルクラスの人々によって支えられ、拡大していったと推測できる。

5. おわりに

これまで、英国のファッションにおけるキモノ風デザインの流行の分析は、19 世紀末の室内着について考察した先行研究にとどまっていたが、西

欧のファッションが大きく転換する20世紀に入ると、英国でも外出用の衣裳にその流行が顕著に見られることがわかった。クイーンにおいては、キモノ風衣裳は、段階を追ってその特徴を変化させながら、第一次世界大戦まで継続して見られるが、特に1907年と1911年から1913年の大流行には目を見張るものがある。その影響は、当初はモチーフとして採用することによる表面的な影響にとどまったが、次第にシルエットを大きく転換させ、製作方法まで変化させる本質的な影響を与えるに至った。

しかし、それらのデザインの多くは、英国独自のものではなく、パリでの流行を模倣したものである可能性が極めて高い。デザインの欠如という課題は、19世紀の英国ではすでに大きく意識されるところとなっており、アーツ・アンド・クラフツ運動に結びつくのであるが、ここにもその一端がうかがえる。とはいえ、流行の一般への普及といった意味では、英国はフランスを凌ぐものであったことは間違いなく、それは百貨店などでの大規模な販売と、20世紀の消費の主体となった、新興のミドルクラスの力によるものであったと言えよう。フランスのファッションのジャポニスムが数人の有名デザイナーによって牽引されたものであったのに対し、英国では、リバティやハロッズをはじめとする大手百貨店での販売が推進力となった。結果として英国では、ファッションのジャポニスムがより広く一般に普及したと言えるのではないだろうか。

（fig.1）キモノ型ティージャケット（Kimono-shaped Tea Jacket）
（クイーン、1902年10月11日）

（fig.2）「麻のキモノ」
（クイーン、1904年6月11日）

（fig.3）中央
（クイーン、1905年7月1日）

（fig.4）表紙
（クイーン、1908年秋の特別号）

（fig.5）左、「トーキョーコート（Tokio Wrap）」
（クイーン、1908年5月2日）

（fig.6）左端
（クイーン、1907年3月16日）

（fig.7）右
（クイーン、1911年4月29日）

（fig.8）ハロッズ広告
（クイーン、1913年5月3日）

（fig.9）右端
（クイーン、1911年7月22日）

（fig.10）レストランコート
（ⓒHarrods Company Archive）

（fig.11）左、*The Fashions at Harrods Autumn & Winter 1907-08*
（ⓒHarrods Company Archive）

（fig.12）Fays Ltd. 製、龍と青海波の刺繍入りコート
（Courtesy of the Fashion Museum, Bath & North East Somerset Council.）

（fig.13）制作元不明刺繍入りコート
（Courtesy of the Fashion Museum, Bath & North East Somerset Council.）

（fig.14）（fig.15）
リバティ商会1910年代～1930年代製作マント
（ⓒMuseum of London）

［注］

1） 深井晃子『ジャポニスムインファッション　海を渡ったキモノ』（平凡社、1994）
2） 米今由紀子「19 世紀後半のイギリスのジャポニスム―雑誌にみる日本の紹介と服飾―」（『国際服飾学会誌』（28）、2005、pp.55-75）佐々井啓「19 世紀イギリスの日本趣味―ティー・ガウンと子どもファンシー・ドレスを中心に―」（『日本家政学会誌』61（4）、2010、pp.221-230）Elizabeth Kramer “From Specimen to Scrap: Japanese kimono and textiles in the British Victorian Interior, 1875-1900,” *Material Cultures in Britain, 1740-1920*, ed. John Potvin and Alla Myzelev. Ashgate, 2009. pp.129-147 など。
3） *L'Esquella de la Torratxa*, 1904 年 5 月 20 日。リカルド・ブル氏よりご教示頂いた。
4） *Boy's Own Magazine* の編集などで知られる 英国の編集者 S. O. ビートンによる。
5） 馬淵明子『ジャポニスム―幻想の日本』（ブリュッケ、1997）
6） The British Newspaper Archive を用いた調査による。各年の記事数は以下の通り。1895 年 =17，1896 年 =17，1897 年 =13，1898 年 =13，1899 年 =19，1900 年 =18，1901 年 =14，1902 年 =21，1903 年 =48，1904 年 =39，1905 年 =9，1906 年 =17，1907 年 =165，1908 年 =98，1909 年 =20，1910 年 =21，1911 年 =51，1912 年 =34，1913 年 =139，1914 年 =68，1915 年 =16，1916 年 =11，1917 年 =6，1918 年 =16，1919 年 =11，1920 年 =9
7） 輸出用キモノの流通について詳しくは、拙稿「20 世紀初頭の英国における日本製輸出用キモノの流通と日英業者の相互交渉について」（『デザイン理論』（65）、意匠学会、2014 年、pp.15-29）を参照されたい。
8） 『大日本外国貿易年表』のデータに基づく。
9） クイーン、1903 年 4 月 25 日
10） 橋本順光 ”White Hope or Yellow Peril? :Bushido, Britain, and the Raj” David Wolff, et al. (eds.), *The Russo-Japanese War in Global Perspective*, v.2 (Leiden, Brill, 2007)
11） クイーン、1904 年 6 月 11 日
12） クイーン、1904 年 3 月 5 日。「ダルマティカ」とは、カトリックの司祭の儀式用衣装のこと。
13） クイーン、1905 年 7 月 1 日
14） 廣田孝の一連の研究に詳しい。
15） 『高島屋百年史』（高島屋、1941 年）、*Novelties in Japanese Articles*（高島屋横浜貿易店、1911 年）などの記述による。
16） クイーン、1906 年 9 月 29 日
17） クイーン、1906 年 8 月 4 日
18） 谷田博幸『唯美主義とジャパニズム』（名古屋大学出版会、2004 年）。

19）成恵卿『西洋の夢幻能―イェイツとパウンド』（河出書房新社、1999 年）。柴田依子『俳句のジャポニスム―クーシューと日仏文化交流』（角川学芸出版、2010）。
20）橋本順光『茶屋の天使―英国世紀末のオペレッタ『ゲイシャ』（1896）とその歴史的文脈』（『ジャポニスム研究』（23）、ジャポニスム学会、2003、pp.30-50）など。
21）クイーン、1907 年 4 月 20 日
22）同上
23）クイーン、1908 年 5 月 2 日
24）クイーン、1913 年 1 月 18 日
25）谷田前掲論。
26）「ボウ・ベルズ・ウィークリー（*Bow Bells Weekly*）」、1880 年 1 月 11 日
27）クイーン、1912 年 6 月 29 日
28）クイーン、1911 年 7 月 22 日
29）『［カラー版］世界服飾史』（美術出版社、2010）
30）*Harrods General Catalogue*, Harrods Company Archive, 1910.
31）シルエットや製作方法の変化には、バレエ・リュスの流行など、キモノ以外の要素も当然あったが、本稿ではキモノの影響に論点を絞りたい。
32）年代の特定は、サザビーズ・オークションハウスのケリー・テイラー氏による。
33）*The Fashions at Harrods Autumn & Winter 1907-1908*, Harrods Company Archives. 右側の女性は、浮世絵の見返り美人のポーズをとっている。浮世絵の美人画の流行に呼応して、19 世紀の終わりから、ヨーロッパでもファッション関係の写真、ポスター、雑誌の挿絵などにこのポーズが多く見られるようになった（深井前掲書）。
34）T. Cutler や A. Teur の紹介によってヨーロッパで広まり、工芸品など様々なデザインにモチーフとして取り入れられた。「KATAGAMI Style 世界が恋した日本のデザイン」展にてはじめて、その、国をまたいだ多岐にわたる影響が明らかにされた。
35）英国の小説におけるキモノの描写について詳しくは、拙稿「20 世紀初頭の英国の大衆小説におけるキモノとキモノ姿の女性表象の変化―キモノブームという視点から―」（『ジャポニスム研究』（35）、ジャポニスム学会、2015 年）を参照されたい。
36）*The Pink Kimono: A Story of Values ― and Love*, Dorothy Marsh Garrard, *Quiver*, 1920.

［参考文献］（注で言及したもの以外）

The Queen 1900 年 1 月号～ 1919 年 12 月号

（大学院博士後期課程単位取得退学／日本学術振興会特別研究員）

SUMMARY

Japanese Kimono Influence on British Fashion at the Beginning of the 20th Century through the Articles of *Queen* Magazine

Akiko Savas

This paper clarifies the significance that kimonos had in British fashion history at the beginning of the 20th century by examining the articles and advertisements in *Queen*, one of the most influential women's magazines in Britain at that time, as well as the examples of real kimono-inspired dresses stored in museums in Britain. It also discusses who was the main target for the "Kimono Craze" in Britain.

Judging by the articles and advertisements in *Queen*, there are four stages of transition of characteristics of kimono-inspired dresses. Initially, adopted characteristics of kimono were superficial such as motifs like Japanese embroideries or kimono sleeves. They were followed by more fundamental and structural influence, modeled on the whole silhouette. The examples of real kimono-inspired dresses stored in British museums show that makers even adopted the method of making authentic Japanese kimonos. Finally, kimono-inspired dresses became commonly recognized as fashionable clothing. They were prevalent especially in 1907 and between 1911 and 1913.

During this period, several shops and department stores, such as Harrods in London, dealt with kimono-inspired dresses. They were located mainly in the west part of London, which was a wealthy and highly fashionable area. That is, "kimono" was a fashion for wealthy people, and the burgeoning middle class, who had purchasing power, became the primary constituency for kimono-inspired fashion. It can be said that the "Kimono Craze" became epidemic in the 20th century because of the presence of an emerging middle class at that period.

By contrast with France, the world's centre of fashion, the influence kimonos had in Britain was not smaller, but even larger. It created a "Kimono Craze" in Britain, led by department stores which sold kimono-inspired fashion widely in the country and by the emerging middle class who were the primary consumers.